市原市永田窯跡群第2次発掘調查報告書

平成6年度

財団法人 千葉県文化財センター

市原市永田窯跡群第2次発掘調査報告書

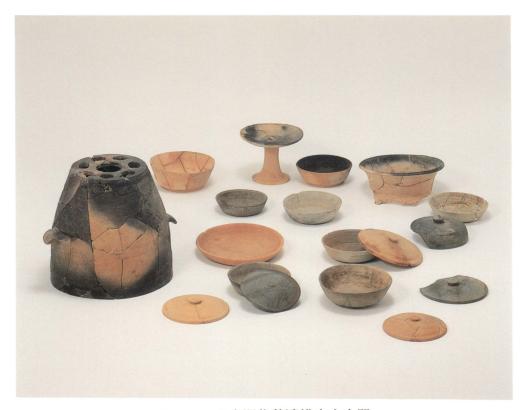
平成6年度

財団法人 千葉県文化財センター



Bトレンチ土器集積遺構

巻頭図版2



Bトレンチ土器集積遺構出土土器

序文

千葉県内には、近年実施した生産遺跡の分布調査によって、須恵器や瓦などの窯跡が30数か所確認されています。これらの遺跡は、古代の役所であった官衙との関連が強く、 房総の古代史を知る上で、欠くことのできない重要な資料であります。

このため、千葉県教育委員会では、遺跡の性格、内容及び規模などを正確に把握し、 今後の保護、活用を図るための資料を得ることを目的として重要遺跡確認調査を実施し ております。この事業は、国庫補助金を得て、昭和55年度から古墳、貝塚、窯業遺跡な どの確認調査を実施しているものであり、これまでに多くの成果が挙がっております。

永田窯跡群の調査は、この重要遺跡確認調査の窯業遺跡第2期第3年次の事業として 財団法人千葉県文化財センターに委託して実施しました。永田窯跡群は、上総国分僧寺・ 尼寺などに須恵器を供給したと考えられている県内最大規模の窯跡として、全国的にも 著名であります。今回の調査は、平成4年度の調査成果から、窯跡の範囲が拡大する可 能性が考えられたため、窯跡の最終的な範囲確認を目的に、第2次調査として実施した ものです。

調査の結果、新たな窯跡1基の他に、焼成不良の須恵器が大量にまとまって出土した 土器集積遺構も検出され、古代窯業生産の在り方を知る上で貴重な資料を提供しました。 また、永田窯跡群からは、数次にわたる調査により、18基の窯跡の存在が確認されて おり、今年度の成果を加えると2か所の地域に19基の窯跡が確認されたことになります。 これで永田窯跡群の範囲はほぼ確定できたことと考えられ、当初の目的はほぼ達成され たものと考えております。

従いまして、今後、具体的な保護施策を検討してまいりたいと考えており、今回の調 査成果を十分に活用させていただきます。

終りに、文化庁をはじめ、調査のために土地を提供していただいた土地所有者の方々や地元市原市教育委員会、さらに発掘調査を担当された財団法人千葉県対化財センターの皆様に心からお礼申し上げます。

平成7年3月

千葉県教育庁生涯学習部 文化課長 森 成 吉

凡 例

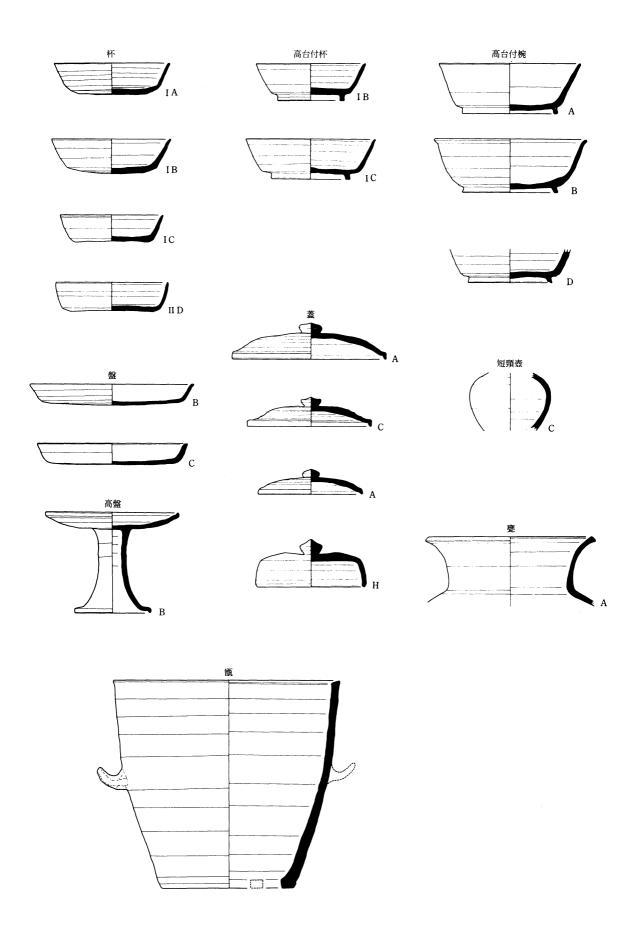
- 1. 本書は市原市不入697-13他に所在する永田窯跡 (遺跡コード219-063) の発掘調査報告書である。
- 2. 本事業は、千葉県教育委員会が国庫補助を受けて行っている窯業遺跡確認調査の第2期第 3年次であり、調査は財団法人千葉県文化財センターに委託して実施した。
- 3. 発掘調査期間は平成6年10月3日から同年10月31日までであり、調査面積は200㎡である。 整理作業及び報告書作成は平成6年11月1日から同年12月28日までである。
- 4. 調査、整理及び報告書作成は、調査研究部長西山太郎、市原調査事務所長石田広美の指導 のもとに、主任技師森本和男が担当した。
- 5. 調査の実施に当たっては、市原市教育委員会、土地所有者の戸谷純夫・鶴岡信・明賀邦夫・ 石井常治の各氏をはじめ地元の皆様からさまざまの便宜を図っていただいた。記して感謝 の意を表します。
- 6. 発掘調査から報告書刊行に至るまで、下記の諸氏から御指導、御協力をいただいた。 (敬称略)

田所真 · 高橋康男 · 辻史郎

- 7. 本書の第1図は国土地理院発行の1/25,000地形図(鶴舞)を使用した。
- 8. 本書の遺物挿図の縮尺はすべて1/3である。
- 9. 土器の分類は右図に示したとおりである。分類と編年の基準は、谷旬、郷堀英司、小林信 一 『千葉県文化財センター研究紀要14』(平成5年12月)17~23、112~125ページを参考 にした。また、高台付杯・杯についてはさらに調整技法(ヘラケズリ)で以下のように細分を行っている。

I類:底部全面に回転ヘラケズリが及ぶもの。

II類:底部の外周に回転ヘラケズリがなされ、底部中央に回転糸切り離し痕が残存する もの。



本文目次

序				
凡例				
目 次				
I はじめに		•••••		1
1)遺跡の位置と環境		•••••		1
2) 研究略史		•••••		1
II. 調査の概要		•••••		4
1) 調査の目的と調査区の設定		•••••		4
2) 調査の経過		•••••	••••••	4
Ⅲ. 遺構と遺物		•••••		7
1) 土器集積遺構		•••••		9
2) 19号窯跡		•••••		14
IV. まとめ		•••••		19
ल्य भन	目次			
四 双	日认			
巻頭図版 1 Bトレンチ土器集積遺構	図版 4	遺構	1. Bトレンチ土器集積遺	構
巻頭図版 2 Bトレンチ土器集積遺構出土土器			(北から)	
図版1 航空写真 永田、不入窯跡と周辺の			2. Bトレンチ土器集積遺	構
地形(1/12,500)			(東から)	
図版 2 遺構 1. 永田窯跡遠景			3. Bトレンチ19号窯跡	
2. Bトレンチ発掘調査前	図版 5	遺構		
3. Bトレンチ土器出土状態	図版 6	遺物		
(北から)	図版 7	遺物		
図版 3 遺構 1. Bトレンチ土器出土状態	図版 8	遺物		
(南から)	図版 9	遺物		
2. Bトレンチ土器出土状態	図版10	遺物		
(細部)				
3. Bトレンチ土器出土状態				
(細部)				

挿図目次

第1図	永田窯跡群の位置と周辺の関連遺跡(1/25,000)	3
第2図	永田窯跡トレンチ配置図(1/2,500)	5
第3図	Bトレンチ遺構配置図(1/100)	7
第4図	土器集積遺構平面図(1/80)	9
第5図	- 土器集積遺構遺物出土グリッド図(1/100) ······	10
第6図	土器集積遺構出土遺物(1)(1/3)	11
第7図	土器集積遺構出土遺物 (2) (1/3)	12
第8図	土器集積遺構出土遺物(3)(1/3)	13
第9図	土器集積遺構出土遺物(4)(1/3)	14
第10図	19号窯跡平面図 (1/80)、断面図 (1/40)	15
第11図	19号窯跡出土遺物(1/3)	16
第12図	永田、不入窯跡群の遺跡範囲図(1/5,000)	21
第13図	永田窯跡群·窯跡集成図 1 ·····	22
第14図	永田窯跡群·窯跡集成図 2 ·····	23
第15図	不入窯跡群·窯跡集成図 1 ······	24
附 図	永田·不入窯跡群窯位置図 (1/1,250)	
	表目次	
	农 日 认	
第1表	Bトレンチ・グリッド別須恵器数量表	8
第2表	土器集積遺構出土遺物	17
第3表	19号室跡出土遣物	18

Iはじめに

1)遺跡の位置と環境

永田窯跡群は、房総半島のほぼ中央に位置している。房総半島には、北部に洪積世台地(下総台地)が、また中部から南部に丘陵地帯(上総丘陵)が広がり、この丘陵地帯の中央部を南から北へ向かって養老川が流れている。永田窯跡群はこの養老川中流域の東岸の河岸段丘上に所在する。付近の流域は典型的な曲線・短絡地形を形成し、複雑な景観を見せている。

永田窯跡群は、古い川跡によって囲まれた細長く伸びる河岸段丘の南側斜面に位置し、標高は50m前後である。本遺跡の北側斜面には不入窯跡群があり、両者は一体となって大きな窯跡群を形成している。

本遺跡の南西約800mの地点、谷一つ挟んだ段丘に、比較的古い7世紀前半の須恵器窯跡を有する大和田遺跡がある(1)。また、本遺跡の北約3.5kmの所には3基の須恵器窯跡を有する石川窯跡がある(2)。房総半島の中央部、やや地形の入り組んだ養老川中流域で須恵器生産が盛んに行われたのである(第1図、図版1)。

2) 研究略史

永田窯跡群と不入窯跡群の発掘調査及びその出土土器の研究は20年前から本格的に始まった。1974年に国士館大学考古学研究室によって両遺跡が調査され、永田窯跡群から2地点14基の窯跡が、不入窯跡群では1地点4基の窯跡が検出された。その報告書が2年後に刊行され、須恵器窯の全盛期は8世紀末から9世紀初頭とされた(3)。折から、開発の波にのって千葉県各地で歴史時代の大規模な集落遺跡が相次いで発掘されるようになった。出土する土器数量も急激に増加した。資料が豊富になると同時に、土器研究も活発化し(4)、永田窯跡群と不入窯跡群の出土資料は重要な基準資料となった。位置的に上総国分寺に近いことから、国分寺造営事業に付随して永田・不入窯が設置されたのか、そして、窯の性格を「官窯」として捉えられるのか等の点が主な争点となった。

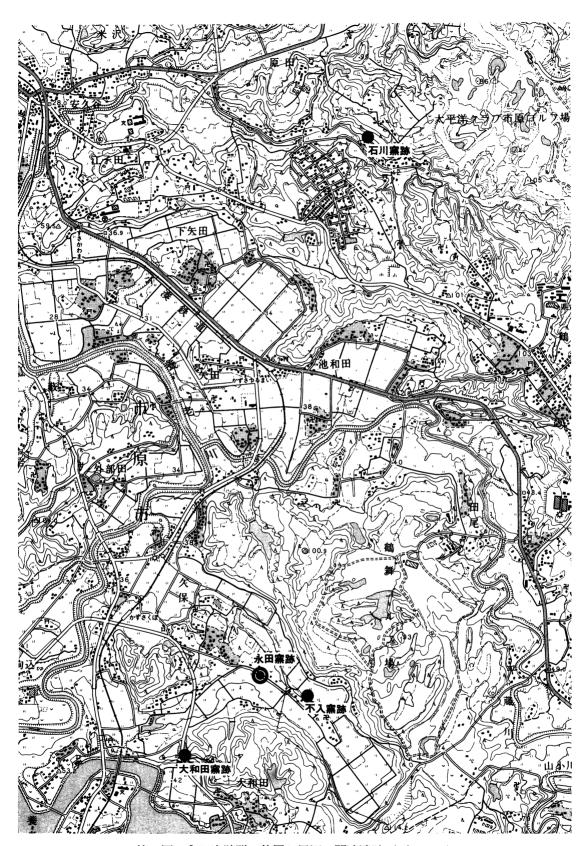
国士館大学による発掘調査以外に、市原市文化財センターが1984、1986、1987年に窯跡周辺一帯に確認トレンチを設定して窯跡の広がりを把握しようとした。しかしながら、市原市文化財センターの行った確認調査は、圃場整備事業に伴う調査であったため、調査対象範囲は谷部の水田、休耕地に限られ、窯跡本体が存在するであろう丘陵斜面部は調査対象範囲外となっている(5)。丘陵上面の宅地造成に伴う調査を、1984年に市原市教育委員会文化課が実施し、永田窯跡群に関連する工房施設とおぼしき住居跡が見つかった(6)。

1992年に千葉県文化財センターによって永田窯跡群の発掘調査が行われた。その結果、新たに数基の窯跡が検出され、それ以前に確認されていた窯跡も含めると永田窯跡群には18基、不

入窯跡群には4基窯跡が存在することがわかった。合計すると永田・不入窯跡群には窯跡が22基あり、灰原その他の焼土遺構等をも考慮に入れると、窯跡は30基以上になると予想された。また、丘陵上からは同時期の住居跡が2軒検出された。これらの住居跡は工房跡とは認められなかったが、窯業に従事する集団の住居跡の可能性が示唆された(*)。さらに、1993年に『千葉県文化財センター研究紀要14』が刊行され、千葉県内の古代窯業生産の実態が詳述された(*)。この本の中で永田・不入窯跡群は窯業生産全体の観点から論じられた。永田・不入窯跡の成立年代は国分寺造営の詔が発布される以前にさかのぼること、操業初期の製品は国衙や官衙に供給された可能性が強いことなどが指摘された。こうして、20年ほど前の発掘調査に端を発した永田・不入窯跡群の解明は、ほぼその全容をつかむことができる段階に至ったと言える。

註

- (1) 高橋康男 『大和田遺跡』市原市文化財センター 1988.
- (2) 奥田正彦 『市原市石川須恵器窯跡確認調査報告書』千葉県文化財センター 1988.
- (3) 大川清 『千葉県市原市 永田・不入須恵窯跡調査報告書』千葉県教育委員会 1976.
- (4) 『シンポジウム資料 房総における奈良・平安時代の土器』史館同人 1983. 『房総における歴史時代土器の研究』房総歴史考古学研究会 1987.
- (5) 山口直樹 『千葉県市原市 永田・不入窯跡』市原市文化財センター 1985. 田所 真『市原市 永田・不入窯跡』市原市文化財センター 1989.
- (6) 田所 真「永田遺跡」『市原市棒ヶ谷遺跡・永田遺跡・海士有木遺跡・北旭台遺跡・姉崎山谷遺跡・喜多高 沢遺跡・辰巳ヶ原遺跡・原遺跡』市原市文化財センター 1989。
- (7) 郷堀英司、小林信―『市原市永田窯跡群発掘調査報告書』千葉県文化財センター 1992.
- (8) 谷旬、郷堀英司、小林信一『千葉県文化財センター研究紀要14』千葉県文化財センター 1993.



第1図 永田窯跡群の位置と周辺の関連遺跡 (1/25,000)

II 調査の概要

1)調査の目的と調査区の設定

永田・不入窯跡群の調査は過去数回にわたって実施され、また、出土遺物に関する詳細な研究も数多く積み重ねられたため、本遺跡の概要はほぼ解明されている。したがって今回の確認調査は、丘陵斜面部の窯跡の広がりを明らかにするための範囲確認調査並びに丘陵上の工房跡の確認調査を目的に企画された。

斜面部の窯跡群の範囲を確定するために、過去の調査で窯跡の検出された斜面に隣接してトレンチを設定し、窯跡が連続して検出されるかどうかを調べた。永田窯跡群の西端を確認するために、1992年の調査で検出された15号窯跡の西側斜面にAトレンチを設定し、さらにその西方25mの地点にもEトレンチを設定した。また、東端を確認するために、1974年の調査で確認された12号窯跡の東南約20mの斜面にCトレンチを設定した。なお、1992年の調査で検出された17号窯跡周辺にトレンチを設定して調査する予定であったが、地主の承諾を得ることができなかったため、この地区の確認調査は断念せざるを得なかった。

調査前の踏査の時点で、1992年の調査で設定された第5トレンチ東端から、大量の土器片を採集することができた。付近に窯業関連の遺構の存在が想定されたため、この地点にBトレンチを設定した。

1984年及び1992年の調査で丘陵上から工房跡、もしくは窯業に従事した人々の住居跡が見つかった。そこで、丘陵上の遺構の広がりを確認するために、以前にこれらの遺構が検出された地点よりもやや東南の、丘陵がやや狭まった地点にDトレンチを設定した(第2図)。

2)調査の経過

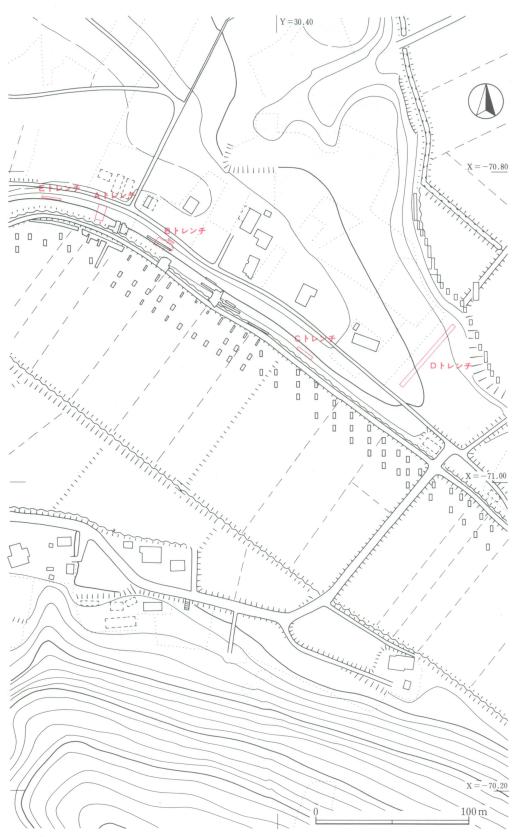
調査は平成6年10月3日から10月31日まで実施された。期間中は好天に恵まれ、比較的順調 に作業が進んだ。

3日の午前中にテントの設営、機材の搬入、調査地周辺の草刈りを行った。午後からDトレンチを設定して発掘を始めた。Dトレンチは丘陵上の休耕地にあり、雑草が繁茂していた。

4日にAトレンチを設定して掘り始めた。このトレンチは丘陵斜面の杉林の中にある。表土はさほど厚く堆積しておらず、深さ30~40cmで粘土質の地山が顔を出した。

6日にBトレンチを設定して、発掘を始めた。このトレンチ周辺は畑で、里芋が植えられていた。掘り始めてすぐに大量の土器が出土し始めた。出土した土器は、すべて焼成不良の須恵器片であった。完形に近い須恵器片はほとんど無く、小さい破片ばかりであった。この時点で、これらの須恵器片について須恵器窯の灰原に投棄された可能性が考えられた。

13日にBトレンチの西側から須恵器窯を検出した。この須恵器窯の検出地点は、1992年に調



第2図 永田窯跡トレンチ配置図 (1/2,500) 赤色は今回調査のトレンチ

査された第5トレンチの2号焼土遺構の位置と一致した。トレンチを拡張した。

Aトレンチから遺構が検出されないことを確認してから、17日からCトレンチを設定して掘り始めた。Cトレンチは丘陵斜面の杉林の中に設定した。

19日に、Cトレンチから遺構が検出されないことを確認してから、Aトレンチの西方にEトレンチを設定して、掘り始める。また、遺構の検出されなかったAトレンチ、Cトレンチ、Dトレンチについて、完掘状態の写真撮影と測量を始めた。

20日にBトレンチの東側を拡張して須恵器片の広がりを追った。

Bトレンチの大量の須恵器片が灰原に廃棄された不良品とすると、隣接する須恵器窯の存在が想定されるので、24日にBトレンチの北側に小トレンチを設定して、須恵器窯の検出を試みた。

25日から、遺構の検出されなかったトレンチの埋め戻しを始めた。また、Bトレンチの須恵器片出土状態の写真を撮影し、測量をした。測量後、須恵器片の取り上げを開始した。取り上げ方法は、1m四方のグリッドごとに遺物を一括して取り上げた。

26日にBトレンチ西側の須恵器窯を精査し、写真撮影をして実測した。この須恵器窯は新たに見つかった窯なので、19号窯と命名した。

27日にBトレンチ北側の小トレンチを掘り終わるが、当初予想した窯は検出されなかった。 Bトレンチの須恵器片を取り上げると、住居跡の壁に類似した浅い掘り込みが出現した。

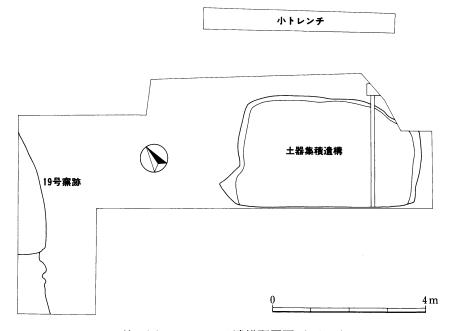
31日にBトレンチの須恵器片取り上げが終了した。写真撮影をして実測をした後、埋め戻した。また、テント等を解体して、すべての作業を終了した。

III 遺構と遺物

今回の調査で設定した 5 か所のトレンチのうち、遺構が検出されたのは B トレンチだけであった。永田窯跡群西端の E トレンチは長さ 12m、幅 1mで、15 号窯跡の西側に設定した A トレンチは長さ 10m、幅 5mであった。 12 号窯跡の東南に設定した C トレンチは、長さ 12m、幅 2mで、丘陵上に設定した D トレンチは長さ 50m、幅 2mであった(図版 5)。

Bトレンチからは、大量の須恵器不良品の投棄された遺構と、窯跡が1基見つかった。このトレンチは1992年の調査で設定された第5トレンチと一部重複している。1992年の調査では1m幅のトレンチしか設定できず、18号窯跡と焼土遺構が2か所確認された。今回の調査では長さ10m、幅2.4mのトレンチを設定した。遺構の検出に応じてトレンチを拡張し、さらに北側にも長さ5m、幅50cmの小トレンチを設定した(第3図)。

Bトレンチの東側では、発掘調査前から耕作面上に多数の土器片が散在していた。調査開始とともに、大量の須恵器片が出土し始めた。いずれも焼成不良の須恵器小片で、完形に近いものはほとんどなかった。焼成不良の大量の須恵器片は、明らかに投棄されたものと判断できたので、これらの須恵器片の分布状態は須恵器窯の灰原と考えられた。そこで、隣接して須恵器窯が存在するかどうか確認するために、北側斜面に小トレンチを設定して調査した。しかしこの小トレンチから須恵器窯は検出されなかった。隣接して須恵器窯が存在しないため、焼成不良の大量の須恵器片は灰原に投棄された不良品と考えることができなくなった。その後、須恵



第3図 Bトレンチ遺構配置図 (1/100)

第1表 Bトレンチ・グリッド別須恵器数量表

<u> </u>	 杯		 身			夔					
出土位置	口縁部	底 部	小 計	蓋	高台付杯	口縁部	頸部	体 部	小 計	その他	合計
Bトレンチ A-3	85 (610)	33 (260)	118 (870)	109 (1,115)	53 (710)	7 (40)	1 (30)	91 (2,135)	99 (2,205)	255 (815)	634 (5,715)
Bトレンチ A-4	83 (580)	40 (1,000)	123 (1,580)	211 (2,355)	71 (975)	3 (170)	1 (20)	3 (35)	7 (225)	243 (500)	656 (5,660)
Bトレンチ A-5	73 (510)	14 (145)	87 (655)	118 (1,155)	33 (465)					155 (290)	393 (2,565)
Bトレンチ B-2	31 (245)	25 (275)	56 (520)	15 (115)	7 (70)	10 (85)	5 (385)	229 (3,880)	244 (4,350)	96 (225)	418 (5,280)
Bトレンチ B-3	307 (1,700)	246 (1,785)	553 (3,485)	323 (2,630)	126 (1,065)	47 (1,115)	45 (665)	747 (10,800)	839 (12,580)	950 (2,010)	2,793 (21,785)
Bトレンチ B-4	189 (1,085)	92 (545)	281 (1,630)	380 (3,650)	128 (1,420)			18 (510)	18 (510)	310 (700)	1,124 (8,070)
Bトレンチ B-5	118 (835)	37 (335)	155 (1,170)	145 (1,675)	57 (62 5)					236 (430)	598 (4,000)
Bトレンチ B-6	201 (1,415)	135 (2,015)	336 (3,430)	237 (5,340)	101 (1,790)	2 (30)		27 (1,355)	29 (1,385)	242 (600)	951 (13,360)
Bトレンチ C-2	13 (55)	11 (250)	24 (305)	4 (125)	2 (455)	1 (5)		45 (470)	46 (475)	40 (100)	122 (1,490)
Bトレンチ C−3	11 (55)	14 (95)	25 (150)	1 (200)		8 (220)	4 (170)	62 (835)	74 (1,225)	65 (150)	165 (1,725)
Bトレンチ C-4	99 (545)	134 (1,285)	233 (1,830)	86 (1,335)	50 (975)			6 (1,455)	6 (1,455)	130 (320)	545 (6,675)
Bトレンチ C-5	13 (55)	13 (75)	26 (130)	5 (30)	3 (30)			1 (30)	1 (30)	24 (60)	59 (280)
Bトレンチ C-6	388 (2,940)	280 (2,275)	668 (5,215)	149 (2,475)	174 (4,105)	1 (575)		1 (10)	2 (585)	530 (1,405)	1,653 (18,325)
Bトレンチ C-7	8 (60)	13 (160)	21 (220)	23 (525)	6 (220)			1 (105)	1 (105)	70 (210)	125 (1,440)
Bトレンチ D-6	10 (40)	21 (105)	31 (145)	2 (80)	1 (5)			3 (90)	3 (90)	41 (85)	85 (925)
Bトレンチ D-7	2 (15)	9 (60)	11 (75)	27 (315)	1 (5)					9 (20)	54 (545)
Bトレンチ 19号窯跡	17 (205)	24 (1,190)	41 (1,395)	7 (720)	8 (455)			2 (195)	2 (195)	6 (45)	71 (2,905)

〔上段は点数、下段括弧内は重量(g)〕

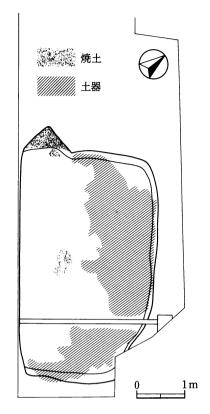
器片を取り上げて精査すると、住居跡の壁に類似した浅い掘り込みを検出した。この掘り込みは長方形をなし、また須恵器片分布範囲の境界線とほぼ一致していたことから、何らかの施設に焼成不良の須恵器片が投棄された可能性を想定した。出土した須恵器片の分量は、整理箱に換算して全部で約20箱の量であった。

Bトレンチの西側、表土下約15cmの浅い地点で19号窯跡が発見された。耕作中のため、トレンチを西へさらに拡張することができず、結局、窯跡の東半分のみを確認した。

1) 土器集積遺構

遺構(第4図、図版2、3、4)

本遺構は、道路と谷に挟まれたやや傾斜の緩い斜面にある(図版2)。1974年に調査された1号窯跡の北約7mに位置する。また、1992年に調査された第5トレンチ内東側の灰原C及び1号焼土遺構と同一の遺構と思われる。長軸4.8m、短軸3.9m、深さ15㎝の浅い掘り込みを検出した。



第4回 土器集積遺構平面図(1/80)

南半分は削平されたと思われる。この浅い掘り込みの中に、焼成不良の須恵器片が長さ4m、幅1mの範囲にわたってやや台形状に大量に分布していた。ほとんどの須恵器片は細片であったが、掘り込みの壁付近に廃棄されてあった須恵器片の中には、完形に近いものも少量あった。完形に近い須恵器は、あたかも積み重ねて廃棄されたかのように、重なって出土した。

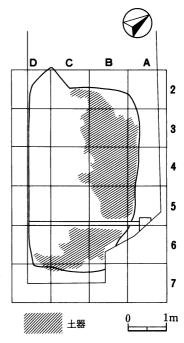
焼土が、遺構の短軸上の壁と遺構の中央から検出された。また、少量の炭が須恵器片に混ざって出土した。

遺構のプラン及び焼土の分布範囲から、この遺構は半分削平された住居跡のように見える。 しかし、硬い床面がないこと、柱穴がないこと、粘土を含んだカマドがないこと、掘り込みが 浅いことなどの理由から、この遺構は恒常的な住居ではなく、窯業に伴う一時的な施設であっ たと判断した。つまり、必要性のなくなった施設に、近くの須恵器窯から排出された不良品が 投棄された遺構と判断した。

遺物 (第5~9図、図版6~9)

遺構から出土した遺物はグリッド別に取り上げた(第5図)。総数10,375点、総重量97.084kgであった。グリッド別に須恵器の器種を集計すると、B-3グリッドから杯、蓋、甕の破片が、B-6グリッドから杯と蓋の破片が、C-6グリッドから杯と高台付杯が多く出土している(第1表)。狭い範囲ながらも廃棄パターンを窺うことができる。

須恵器片のほとんどは赤褐色の小片で、図示できるものは少なかった。完形に近いものでもヒビが入っていたり、変形の著しいものが多かった。杯の底部全面に回転ヘラケズリが及び、また器高が低いので、杯はすべてIAに属する($1\sim5$)。回転ヘラケズリ後、底部を指で若干撫でた痕跡を有する杯があった(4,5)。高台付杯はIB(6)、IC(7,8)、高台付椀はA(9,10)、



第5図 土器集積遺構遺物出土 グリッド図 (1/100)

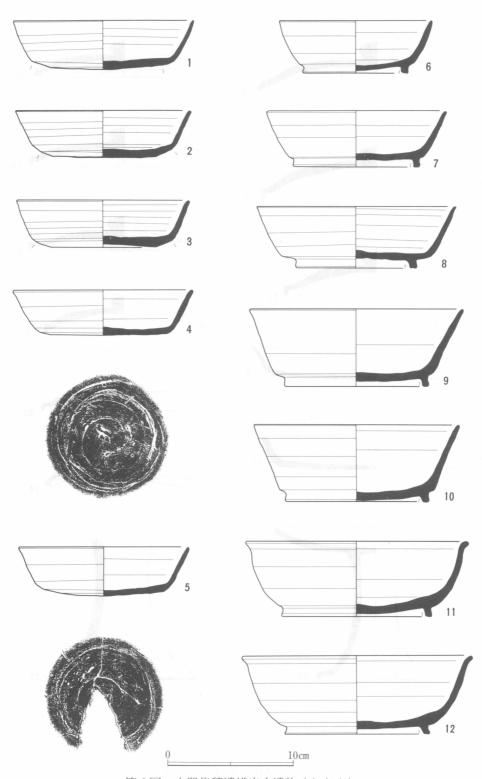
B (11,12) のものがあった。蓋にはA (13,14)、C (15,19,20,21)、D (22,23,24) の器種が、また、盤にはB (16)、C (17)、高盤にはB (18) の器種があった。以前の調査と比べて今回の調査では、甕の破片が多く出土したが、完形に近いものや図示できるものはほとんどなかった。甕はAの器種からなる (26,27,28)。甕の体部表面には、細かくて浅い叩き目が見られた (29)。そのほかに、大型の短頸壺A (32)、小型の短頸壺C (30,31)、長頸壺の底部 (33) が出土している。さらに、非常に稀有な完形に近い甑が出土した (34)。

杯と高台付杯は、底部全面回転ヘラケズリのI類しかないこと、無台杯の破片数が多いこと、 少ないながらも盤が含まれている器種構成などは、出土土器は第II期の様相を示している。

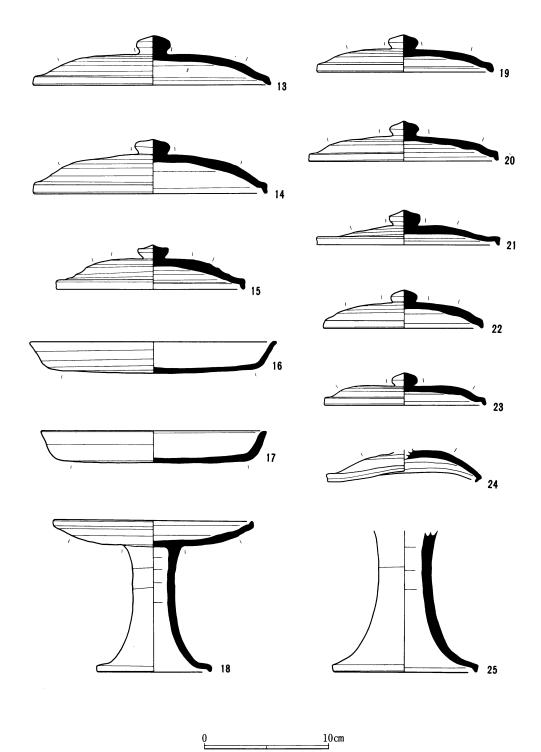
2) 19号窯跡

遺構 (第10図、図版 4)

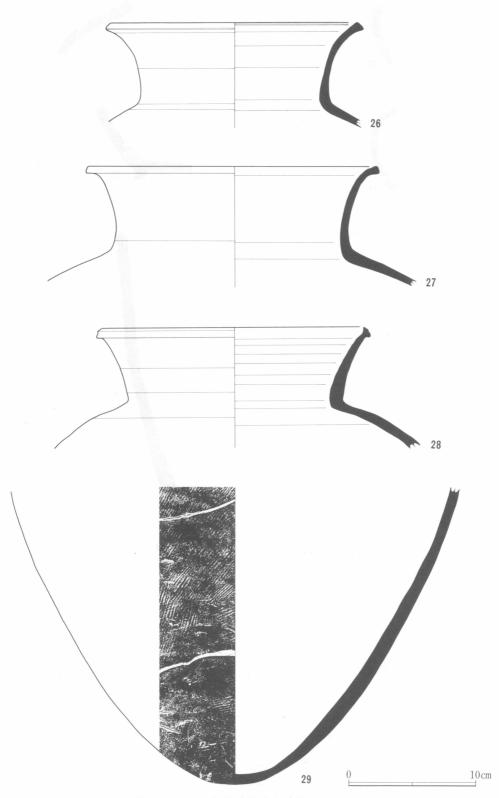
土器集積遺構の西 4 m、1992年に見つかった18号窯の東約 6 mの地点から新たに19号窯が発見された。1992年に設定された第 5 トレンチ内で確認された 2 号焼土遺構と同一の遺構と思われる。比較的浅い地点から硬化した赤褐色の窯体天井部上面が顔を出した。窯跡の半分しか検出できなかったが、窯体長は3.24m、主軸はN-31°-Eとみられる。今回の調査は極力現状保存を意図したため、19号窯跡の調査では、窯体断面を確認するために幅20cmのサブトレンチを



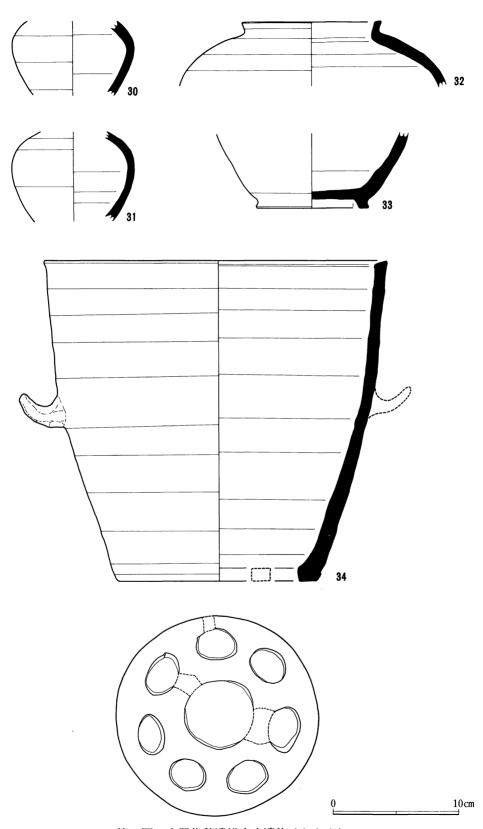
第6図 土器集積遺構出土遺物(1)(1/3)



第7図 土器集積遺構出土遺物(2)(1/3)



第8図 土器集積遺構出土遺物(3)(1/3)

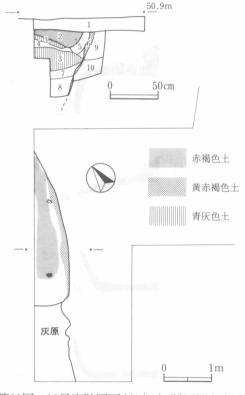


第9図 土器集積遺構出土遺物(4)(1/3)

設定、調査しただけであった。

断面土層は以下の通りであった。

- 1. 耕作土。
- 2. 赤褐色土。焼けて硬化している。天井部の崩落土と思われる。
- 3. 青灰褐色土。環元焼成してかなり硬い。天井部の崩落土と思われる。
- 4. 暗褐色土。
- 5. 暗赤褐色土。
- 6. 黄赤褐色土。やや砂質を帯びる。焼けて硬化している。窯の 側壁と思われる。
- 7. 赤褐色土。やや砂質を帯びる。
- 8. 暗赤褐色土。やや砂質を帯びる。
- 9. 黄褐色砂質土。粗い粒子の砂を含む。
- 10. 灰褐色粘土。



第10図 19号窯跡平面((1/80)、断面図(1/40)

調査中、サブトレンチ下部から水がしみ出て調査不能となったので、第8層以下の部分は不明である。第3層、第7層、第8層から須恵器が出土した。土層断面の状況から、この窯跡は半地下式の窖窯と考えられる。

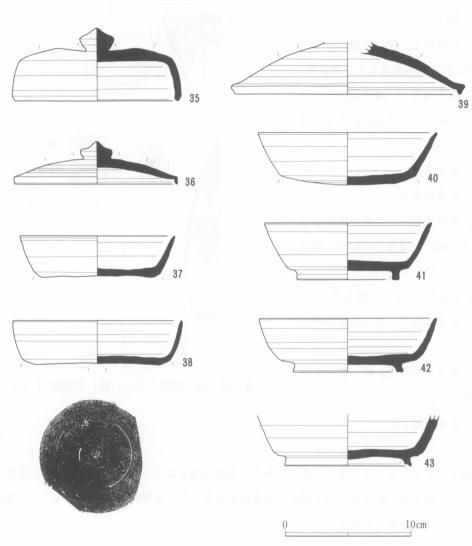
遺物 (第11図、図版10)

19号窯跡の調査は、窯体を全面的に発掘するような調査ではなく、サブトレンチのみを設定しただけであったため、出土遺物は比較的少なかった。ほとんどの遺物は幅の狭いサブトレンチから出土した。

杯には、底部全面へラケズリした杯 IB (40) と杯 IC (37) 及びわずかに底部中央に糸切り痕を残す杯 IID (38) があった。また、高台付杯 IB (41,42)、高台付椀 IB (43) があった。蓋には、短頸壺の蓋に相応する IB (35)、大型の IB (39)、小型の IB (36) があった。

窯跡全体を調査したわけではないので、19号窯跡の時期を明確にすることはできないが、出

土した須恵器に糸切り痕を残す杯が含まれていること、盤がないことなどの点から、19号窯跡は土器集積遺構よりも、やや新しい様相を示していると言えるだろう。



第11図 19号窯跡出土遺物 (1/3)

第2表 土器集積遺構出土遺物

		計	測値(ci	m)							
番号	器種	口径	底径	器高	胎 土	炒	尭 .	成	色調	備	考
1	杯IA	14.4	9.0	3.8	白色粒子、黒色粒子を多く含む	や	Ф	軟	灰褐色	火襷痕	
2	杯IA	14.0	8.2	4.0	白色粒子、白色針状物質を含む	日色粒子、白色針状物質を含む 硬 灰褐色		灰褐色			
3	杯IA	13.6	8.2	3.6	白色粒子、白色針状物質を含む		硬		暗灰色	火襷痕	
4	杯IA	14.2	10.0	3.6	白色粒子、黒色粒子、白色針状物質を含む		硬		暗赤灰色	火襷痕、庭ビナデ	き部ユ
5	杯IA	13.6	9.2	3.9	白色粒子、白色針状物質を含む		硬		青灰色	底部ユビナ	ナデ
6	高台付杯IB	12.0	8.2	4.0	白色粒子、黒色粒子を含む	ゃ	ゃ	軟	黄褐色		
7	高台付杯IC	14.0	10.0	4.3	白色粒子、白色針状物質を含む		硬		黄褐色	黒斑	
8	高台付杯IC	15.7	9.4	4.8	白色粒子、白色針状物質を多く含む		硬		青灰色	火襷痕	
9	高台付椀A	17.0	11.4	6.0	白色粒子、黒色粒子を含む		軟		黄褐色		
10	高台付椀A	16.2	11.2	6.0	白色粒子、白色針状物質を含む		軟		黄褐色		
11	高台付椀B	17.6	11.8	5.9	白色粒子、黒色粒子、白色針状物質を含む	ゃ	や	軟	黄灰色		
12	高台付椀B	18.2	11.2	6.1	白色粒子、黒色粒子を含む	や	p	軟	黄灰色		
13	蓋A	19.0		3.8	白色粒子、黒色粒子を含む	ゃ	Þ	軟	暗灰色	火襷痕	
14	蓋A	18.6		4.2	白色粒子、黒色粒子、白色針状物質を含む	p	p	軟	黄灰色	黒斑	
15	蓋C	15.0		3.5	白色粒子、白色針状物質を含む		硬		青灰色	火襷痕	
16	盤B	19.6	15.0	2.5	白色粒子、黒色粒子を含む	p	p	軟	黄褐色		
17	盤C	18.0	14.0	2.5	白色粒子、褐色粒子を含む		軟		黄灰色	変形顕著	
18	高盤B	16.0	7.0	12.0	白色粒子、褐色粒子、白色針状物質を含む	P	p	軟	黄灰色	黒斑	
19	蓋C	14.0		2.9	白色粒子、褐色粒子を含む		軟		黄灰色		
20	蓋C	15.0		3.2	白色針状物質を含む		軟		黄灰色		
21	蓋C	14.6		2.7	白色粒子、白色針状物質を多く含む		硬		青灰色	火襷痕	
22	蓋D	12.8		2.9	褐色粒子、黒色粒子を含む	P	p	軟	黄褐色		
23	蓋D	12.6		2.5	褐色粒子、黒色粒子を含む	や	Þ	軟	黄褐色		
24	蓋D				白色粒子、白色針状物質を多く含む		硬		青灰色	火襷痕、変形	顕著
25	高盤		11.4		白色粒子、白色針状物質を含む	P	p	軟	黄灰色	黒斑	-
26	甕 A	19.6			白色粒子、黒色粒子、褐色粒子を多く含む 白色針状物質を含む	P	p	軟	黄灰色	黒斑	
27	甕A	23.4			白色粒子、褐色粒子、白色針状物質を含む		軟		黄褐色		
28	甕A	21.0			白色粒子、黒色粒子を含む		硬		暗灰褐色		
29	甕				白色粒子、黒色粒子、白色針状物質を多く含 む		硬		暗灰色	内面ユビナ	トデ
30	短頸壷C				白色粒子、黒色粒子を多く含む	や	p	軟	黄褐色		
31	短頸壷C				白色粒子、黒色粒子を多く含む、白色針状物 質を含む	や	ゃ	軟	黄褐色		
32	短頸壷A				白色粒子を多く含む		硬		暗灰褐色		
33	長頸壷?		8.8		白色粒子、白色針状物質を多く含む	P	ゃ	軟	黄褐色	黒斑	
34	龥	27.4	16.0	25.0	白色粒子、黒色粒子を多く含む	や	ゃ	硬	暗褐色	黒斑	

第3表 19号窯跡出土遺物

—	器種	計測値(cm)		m)	胎 +	kt +	4. ≒m	£#\$ +V.
番号	一	口径	底 径	器高	胎 土 -	焼成	色調	備考
35	蓋H	13.0		5.7	白色粒子、白色針状物質を多く含む	硬	暗青灰色	
36	蓋D	13.2		3.4	白色粒子、白色針状物質を多く含む	硬	青灰色	火襷痕
37	坏IC	12.4	9.0	3.2	白色粒子、白色針状物質を多く含む	硬	青灰色	火襷痕
38	坏II D	13.4	10.0	3.4	白色粒子、黒色粒子、白色針状物質を多く含む	硬	青灰色	火襷痕、底部外周へ ラケズリ、回転糸切 痕
39	蓋A	18.0			白色粒子、白色針状物質を含む	硬	青灰色	火襷痕、変形顕著
40	坏IB	14.2	7.0	4.1	白色粒子、黒色粒子を多く含む	やや硬	暗灰白色	火襷痕
41	高台付坏IB	13.2	8.0	4.4	白色粒子、黒色粒子を多く含む	やや硬	暗青灰色	
42	高台付坏IB	14.0	8.6	4.2	白色粒子、褐色粒子、白色針状物質を多く含 む	硬	暗青灰色	
43	高台付椀D		10.0		白色粒子、白色針状物質を含む	硬	暗青灰色	

Ⅳまとめ

今回の調査で、8世紀第3四半世紀前半に比定されている第II期の土器集積遺構と、それよりもやや年代の下がる須恵器窯1基(19号窯跡)が確認された。これで、永田・不入窯跡群全体で23基の須恵器窯が確認されたことになる。今回の調査の大きな目的は、永田窯跡群の遺跡範囲を確認することにあった。本遺跡の発掘調査は20年前に始まり、これまでにも数度にわたって遺跡周辺の確認調査が実施されてきた。また、千葉県内の数少ない須恵器窯跡として、出土した須恵器に関する詳細な論考も数多く発表されてきた。このような状況のもとで、遺跡の概要は既にほぼ明らかになっていると言えるだろう。したがって、今回の確認調査は、遺跡の内容の解明と同時に、遺跡の範囲を正確に把握することが主要な目的になっている。

そこでまず、丘陵斜面における窯跡の広がりを見てみよう。丘陵斜面に存在する永田窯跡群の西端は、今回の調査で設定したEトレンチ、Aトレンチから窯跡が見つからなかったため、1992年の調査で確認された15号窯跡が窯跡群の西端と考えられる。また東端は、今回設定したCトレンチから窯跡が見つからなかったので、1974年に確認された12号窯がその東端と想定できる。厳密に言うと、12号窯とCトレンチとは20mほど離れているため、この間から将来新たに窯跡が見つかるかもしれない。もし見つかったならば、その窯跡が永田窯跡群の東端になる。

斜面に存在する永田窯跡群に対応して、丘陵上に窯業に伴う工房跡や、工人達の住居跡があったと予想される。1992年の調査で丘陵上の第3トレンチから同時代の1号住居跡、3号住居跡が見つかった。また、1984年の調査で窯業に付随すると考えられる工房跡が見つかった。さらにこの工房跡周辺からは須恵器の採集も報告されているい。すなわち、ロクロピットを備えた工房跡や粘土採掘坑が丘陵上面から未だ検出されていないが、丘陵上には須恵器窯に対応する窯業生産関連の施設及び窯業に従事していた人々の住居の展開していた可能性が強い。したがって、窯業生産に関連する施設をも含めて永田窯跡群の遺跡と捉えるならば、永田窯跡群に対応する丘陵上も窯業遺跡の範囲として考える必要性があるかもしれない。

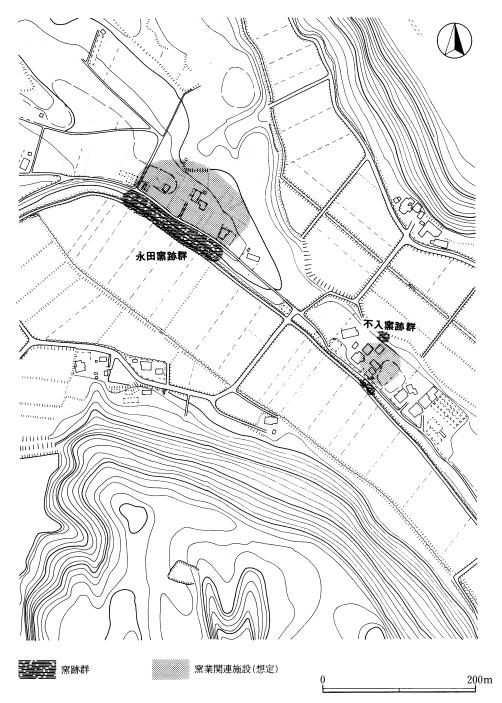
永田窯跡群の北西には三角形の丘陵面が広がり、その奥に南北に走る東向きの丘陵斜面がある。この斜面から窯跡は検出されていない。また、1986年に設定された斜面裾部の確認トレンチからも、須恵器の出土は伝えられていない。この地区の斜面に須恵器窯は設けられたことはなく、この斜面に対応した丘陵上面にも窯業生産関連の施設及び住居は存在しないと推測できる。つまり、永田窯跡群に付随する窯業生産の関連施設や住居は、背後の丘陵全面には広がっていなかったと考えられる。

永田窯跡群の東南約250mの北側斜面に不入窯跡群がある。狭い丘陵を挟んだ南側の反対側斜面に、1992年の調査で検出された永田17号窯がある。谷旬・郷堀英司・小林信一氏の編年によると、南側斜面には I 期とIII期の窯跡が、そして北側斜面には II 期からIV期の窯跡の存在が予

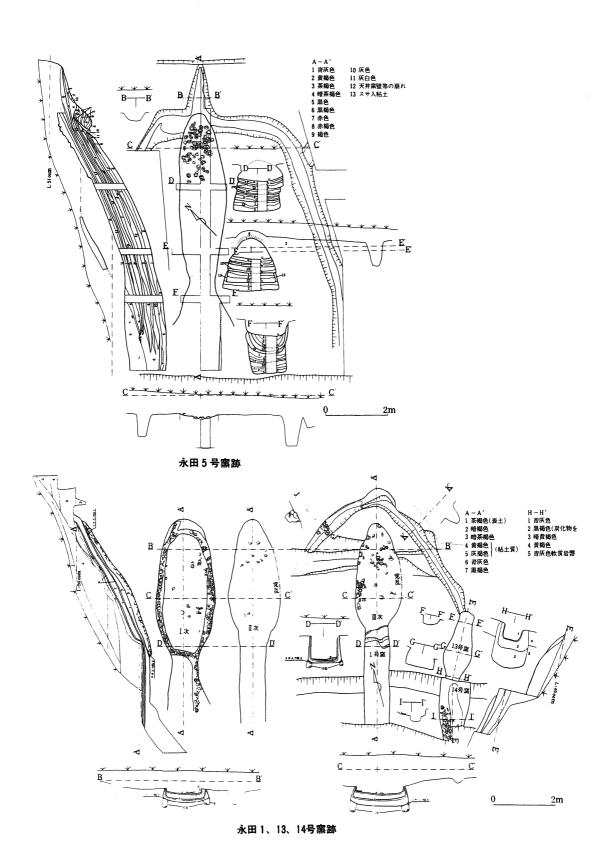
想されている⁽²⁾。両者の窯跡群が同時に存在していた時期もあった。南側斜面については、残念ながら今回の調査で新たなトレンチを設定することができず、従来の所見に新事実を付け加えることができなかった。1992年の調査で、この斜面から17号窯以外に灰原が2か所検出されているので、未発見の窯跡が確実に存在すると思われる。ただし、1987年度の水田面での確認調査で設定された第1トレンチ以外に、付近の確認トレンチから須恵器出土の報告がないので、南側斜面の窯跡群は第1トレンチの範囲以外の斜面に広がる可能性は少ないと見てよいだろう。不入地区の二つの窯跡群の間には幅50mの狭い丘陵面があり、この狭い丘陵面にも窯業生産に関する施設や住居が広がっていたと思われる。現在、付近は宅地と化しているため、それらの遺構を確認することは困難となっているが、窯業生産関連施設が存在する可能性は高い(第12図)。

註

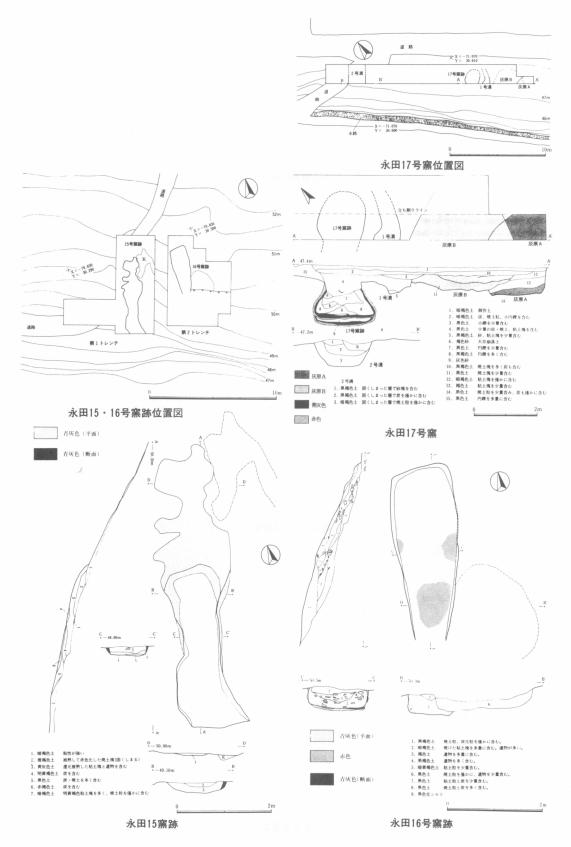
- (1) 田所真『市原市 永田・不入窯跡』市原市文化財センター 1989. 24頁。
- (2) 谷旬、郷堀英司、小林信一『千葉県文化財センター研究紀要14』千葉県文化財センター 1993. 120頁。



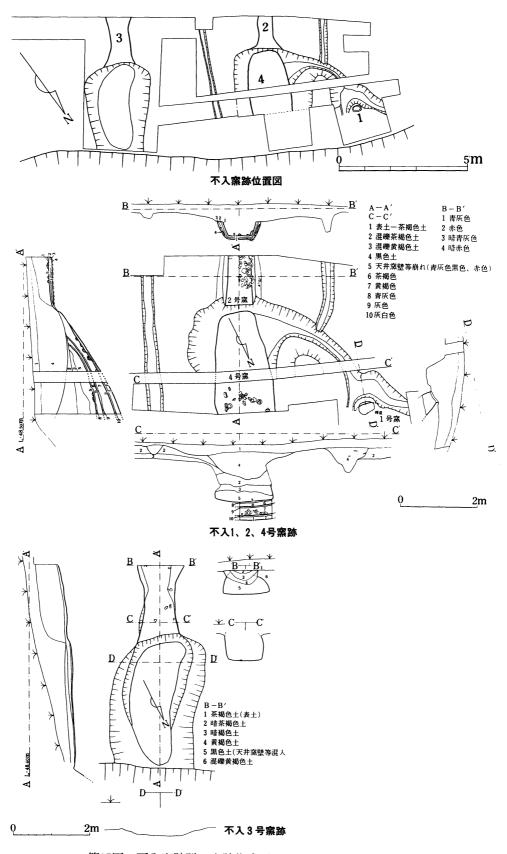
第12図 永田、不入窯跡群の遺跡範囲図(1/5,000)



第13図 永田窯跡群・窯跡集成図 1 (大川1976より転載)



第14図 永田窯跡群・窯跡集成図 2 (郷堀・小林1992より転載)



第15図 不入窯跡群・窯跡集成図 1 (大川1976より転載)

写 真 図 版



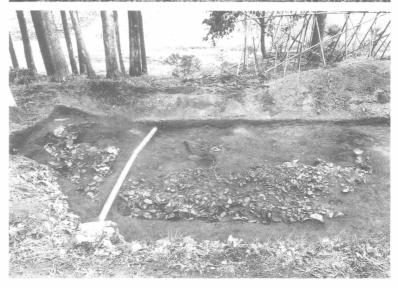
永田・不入窯跡群と周辺の地形(昭和42年・S=1/12,500)



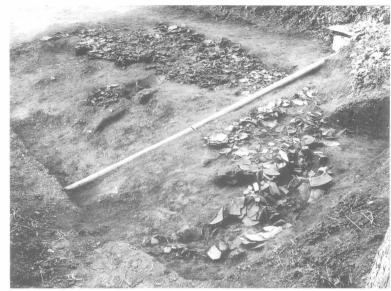
1. 永田窯跡遠景



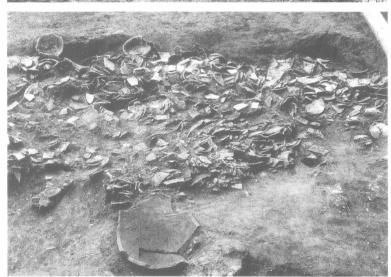
2. Bトレンチ発掘調査前



3. Bトレンチ 土器出土状態 (北から)



1. Bトレンチ 土器出土状態 (南から)



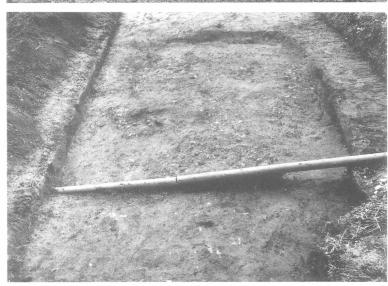
2. Bトレンチ 土器出土状態 (細部)



3. Bトレンチ 土器出土状態 (細部)



1. Bトレンチ 土器集積遺構 (北から)



2. Bトレンチ 土器集積遺構 (東から)



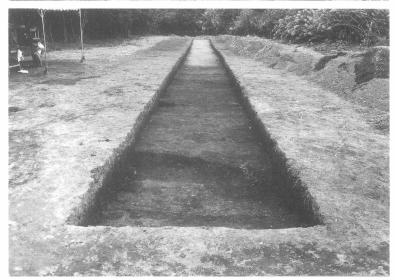
3. Bトレンチ 19号窯跡



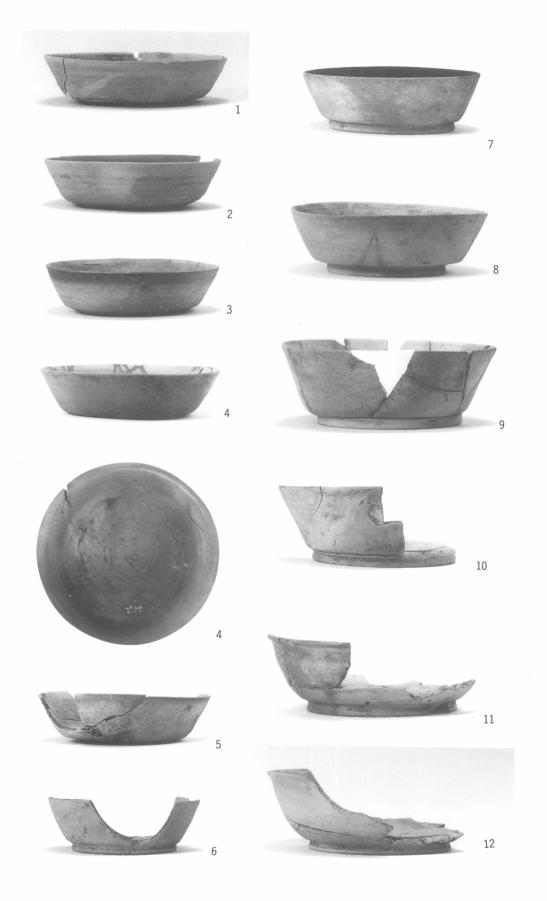
1. Aトレンチ完掘状態

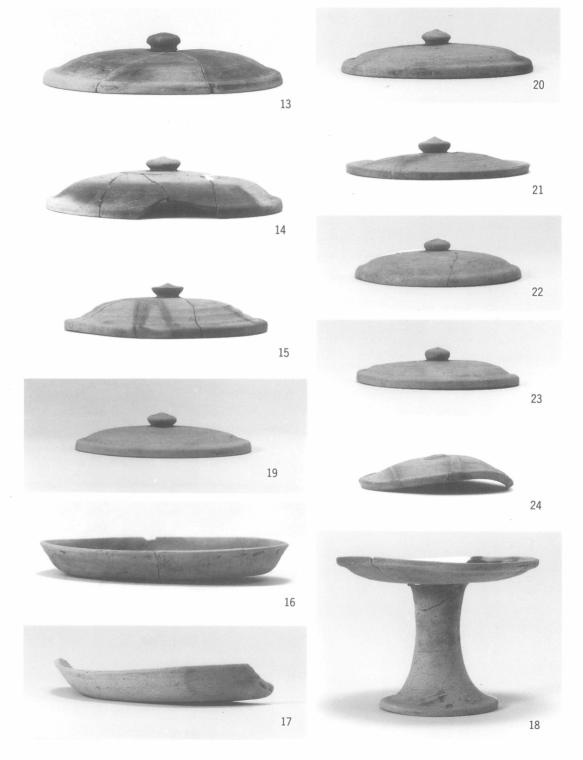


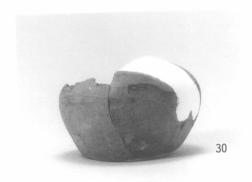
2. Cトレンチ完掘状態



3. Dトレンチ完掘状態

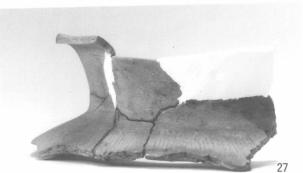


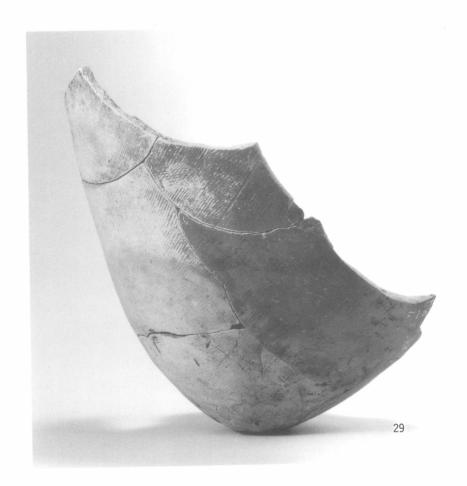






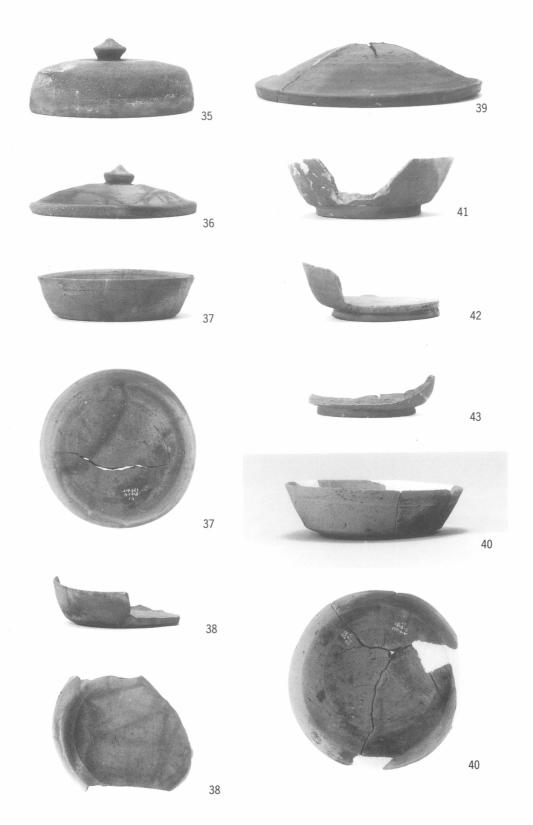










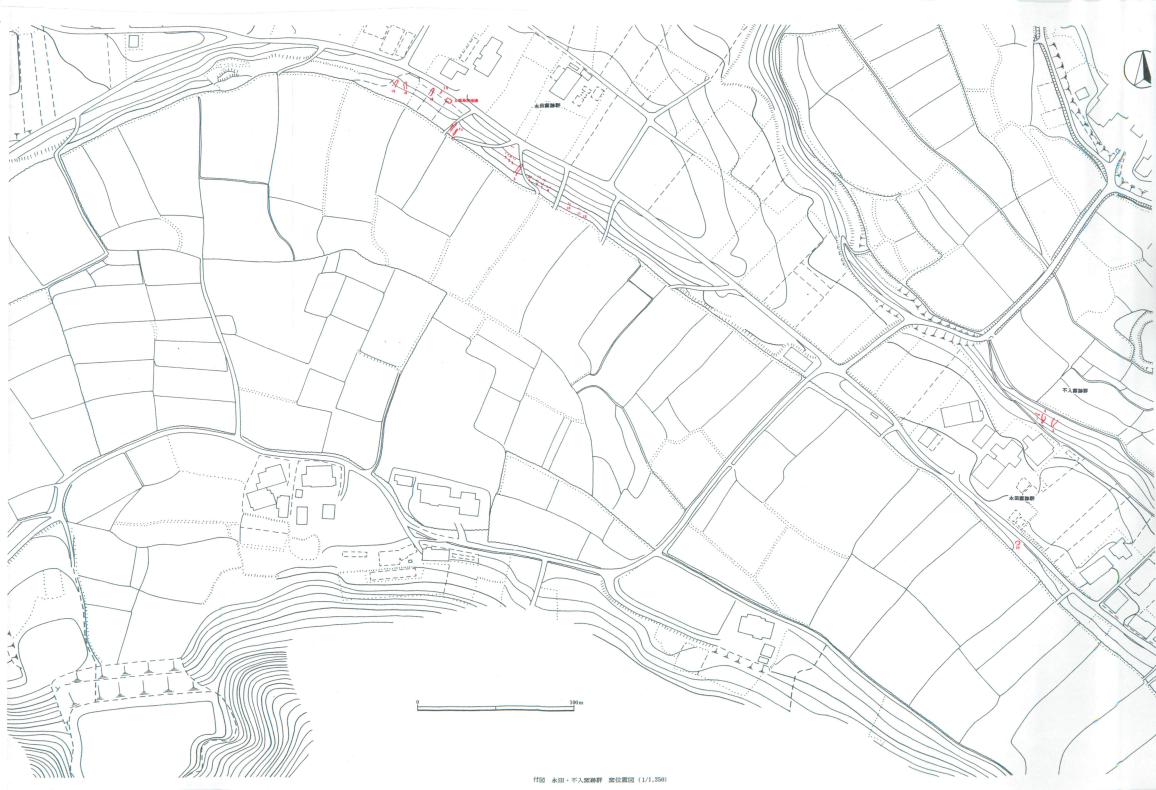


報告書抄録

ふりがな	っちはらしながったようせきぐんはっくつちょうさほうこくしょ								
書 名	市原市永田窯跡群第2次発掘調査報告書								
副書名									
巻 次									
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告								
シリーズ番号	第270集								
編著者名	森本和男								
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター								
所 在 地	〒284 千葉県四街道市鹿渡 809番地 2 Tel 043-422-8811								
発行年月日	1995年 3 月31日								

フリガナ 所収遺跡名	ァリガナ 所 在 地	コー 市町村	- ド 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
*************************************		12219	063	35度 21分 40秒	140度 10分 0秒	19941001~ 19941031	200m²	国庫補助事業 による学術調 査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
永田窯跡群	生産	奈良時代	須恵器窯跡 1基土器集積遺構 1か所	須恵器 杯・高台付杯・高台付 椀・藍・盤・甕	窯は半地下式



千葉県文化財センター調査報告第270集 市原市永田窯跡群第2次発掘調査報告書

平成7年3月31日発行

発 行 財団法人 千葉県文化財センター 四 街 道 市 鹿 渡 809 番 地 2 号

印 刷 株式会社 弘 文 社

本報告書は、千葉県教育委員会の承認を得て増刷したものです。